

ロマンチック保存装置 #12

風色光人

OJI PAPER LIBRARY ●

HUMAN

2009年9月7日～2009年12月3日開催

紙は確かにそこにあって、ひとたび触れば何かを訴えてくるのに、その向こうにいるはずの人間がよく見えない。

皆さんとの交流を重ねる中で、実は見えないのは、皆さんも私たちも同じなのだと気づきました。

ならば紙について耳を傾けるだけでなく、その造り手である私たちだって、感じていることをまっすぐにお伝えしなければ。

全ての紙が生まれながらに持つ魅力をもう一度ニュートラルに見つめ、

紙ならではの良さを4つのテーマから掘り下げる、風・色・光・人。

その第4回は“人”です。

そもそも私たちメーカーは誰よりも紙に近く、各人が紙への揺るぎない想いを温めています。

数値化も、効率化もできないその想いは、誰に語られるでもなくキレイに折りたたまれ、心の隅に片づけられて来ました。

“ニーズに応える”だけでは行き詰まりがちな今だからこそ、

“少なくとも、自分はこの紙のここがいいと思う”と、こちらから声を発し、きっちりと人間に対峙していきたい。

私たちメーカーにできることをしっかりとやって、得体の知れない閉塞感を突破したい。

紙媒体の長所がどうだ、短所がどうだといった退屈な議論など軽く凌駕しつつ、

紙がないと生きられない人間同士の、本当の交流が始まるのです。



① → ドン

レード紙と言えば、今年で誕生 50 周年の“OK ミューズコットン”があまりにも有名。本紙は、同じレード紙でも柄のピッチが広く、その表情において一線を画しています。しかもこの柄、光に透かして見ると、かざして見るとでは見え方が変わる、独特のモノ。ご存知の方はほとんどいないかと思うので、ぜひとも当館の A4 サンプルでお確かめください。こんなマニアックな紙、なかなかありません。

② → ウルトラサテン金藤 N

白さを競い合う紙の中にあつて、本紙はあらゆる条件下で白く見えることを目指した究極の一紙。どんな絵柄でも引き立ち、印刷光沢も抜群。他の追隨を許さない、まさに印刷用紙の最高峰。アート紙ならではの高い印刷再現力だけではなく、独特のしっとりとした面感を維持するため、ソフモノ揃いの職人達が現場で腕を振るってます。ダルアート紙という確固たるジャンルを築いた“サテ金”、ここにあり。

一切のごまかしがない、これこそが究極の白だ。

③ → サンカード^{プラス}

本紙は、“ボンアイボリー+”と併せて、“ボンサン”の愛称で親しまれている、高級白板紙の代名詞。品質といい、突然の注文に対応できる在庫体制といい、その安定感はずばいです。高級白板紙は印刷だけでなく、表面に PP を貼ったり、箱に折られたり、加工されることがほとんど。どんな使われ方でも、その実力をいかに発揮し、お客様の信頼を獲得してきた歴史は本物です。どうぞ安心して、ご指名ください。

はっきはっきはっは
言ってるで、
幻の 1 枚
だね。

間違いのないですよ。

以色色 上。です

4 → ビオトープGA-FS

華やかさを競うファンシーペーパーの世界にあって、飽きのこない、深みのある色にこだわる本紙。中でも、この“ベリーレッド”や“カカオビーンズ”などの濃色が人気です。濃色の紙はムラが目立ちやすく、これをいかに抑え込み、それでいて風合いを持たせるか。その絶妙なバランスを探る作業は、実に繊細です。とことん色にこだわり抜いた深さ。こういう力のある紙を造ることが、現場の誇りでもあるのです。



紙らしいよ。
このくらいの方が、
白くなり過ぎ。

紙はみんな、

この色、
染料じゃなくて、
原料なんだよね。

5 → OKプリンス上質エコG100

100%、古紙パルプだけで造っているのが、本紙。塗工によるお化粧ができない非塗工紙のため、古紙独特のくすみやチリの影響が、そのまま出ます。でも、それも味わいとして受け入れれば、本紙の飾らない魅力の本質が見えてくるはず。多くの紙が高白化へと走る今、この色味はむしろ優しく、紙本来の姿を思い出させてくれます。そんな今この瞬間も、紙づくりの現場では、日によって品質の違う古紙との格闘が続いているのです。

6 → OK未晒クラフト

あらゆる紙の原点と言っても過言ではない、未晒クラフト紙。原料は木材を煮たパルプのみです。つまり、漂白された真っ白いパルプから色づけしたのではなく、素朴なパルプ自身の色味そのもの。素材だけで造る原始的な製法ゆえに、人間の繊細な感覚が今も絶対的に主役です。シンプルな紙が一番難しい。本紙が紙の原点として位置づけられているのも頷けます。



せつない

7 → OFK

OFKとは、王子フレッシュKライナーの略です。その正体は、日本経済を底辺で支える段ボールのベース紙。でも本紙の存在は本当に知られてなくて、その名が口にされるのは価格で叩かれる時くらい。支え続けた長い歴史と実力を知るからこそ、何ともせつない気分になってしまうのです。でも皆さんには、そういった段ボールの枠を軽く越えて、1枚の紙として見ていただきたい。この前代未聞の風合いに、まっすぐに驚いていただけたなら、せつなさだって吹き飛びます。

127.9g/m²

8 → OKトップコート^{プラス}

127.9g/m² (=四六判 110kg) は、紙の重さを表す数字。米坪^{べいひら}と呼ばれ、現場ではこの単位が基本です。グロスコート紙の代名詞であり、当社一の生産量を誇る本紙には、薄物から厚物まで米坪が6種類あり、それぞれの表情に、ほんの僅かですが違いがあります。紙を見つめ続けている職人が、思わずウツトリする光沢感に仕上がるのが、この127.9g/m²の紙。この言葉、グッと来ました。自分だけでなく、マシンも喜んでくれる気がするそうです。

9 → あららぎ

流れていく紙を途中で押さえて付ける、クレープと呼ばれるシワ。本来なら紙には入れてはいけないシワをキレイに入れるという逆転の発想ゆえに、マシン任せにはできず、その製法は今でも現場の勤と経験がモノを言います。全てのファンシーペーパーの中でも最高の技術を必要とし、職人たちの愛着もひとしお。ベテラン

イチマイをらぶなら、どうしてもこのシワなんだよなあ。から新人までもが、いつも以上に気合いを入れて対峙する、特別な銘柄なのです。

いろいろあったけど、
古紙の先駆者は、
ずっと真面目に、
愚直にやっています。

10 → チップボールA

古紙に関しては、何かとお騒がせいたしました。本紙は正真正銘、ずっとずっと古紙100%。華やかなスポットライトを浴びることもなく、様々な芯材として、ひっそりと使用されてきました。毎回、暴れる原料を巧みに操り、裏の世界にて分厚く生き続けてきた実力は、折り紙つき。塗工紙のようにはいきませんが、何とも味のある、洒落た印刷物にもなれるのです。1枚の紙として偏見なく見ていただくことで、必ずや表現の大切な武器となれるのです。

13 → OKマットポスト

美しい面と印刷を追求する、ポスト紙（厚物高級紙）をつくる現場が、思わず惚れ込んだのが本紙。この面が一番じゃない？
実は、ポスト紙には華やかさを競うグロスタイプが多く、マットタイプは稀有な存在です。光らせず、均一に、しっかりと仕上げる作業は、職人たちの高い技術の見せどころ。原紙をキレイに造り上げ、そして丹念に塗工していく流れは、どこを取っても気が抜けず、その熟練の技があるからこそ、最上級の面へ到達できたのだと言えます。

だって紙のくせに、顔まで映りそうな勢いですから。

11 → ハーレムブラック

この紙の緊張感たるや、そりゃあ異次元ですよ。

薄くて、張りがあり、なおかつファンシーペーパーには珍しく光沢感もあります。原料の調合（色付け）→マシン（抄紙）→スーパーカレンダー（光沢付け）→断裁（仕上げ）という流れの中でどこかが一度でもミスをすれば、この質感はたちまち失われ、元には戻れません。さらに、あまりの薄さゆえに扱いにくく、最終の品質検査で紙をめくる女性泣かせの紙でもあります。つまりこの漆黒は、チームワークの結晶。ぜひ、目を凝らしてご覧ください。

12 → OKエナメルボード

この紙らしからぬ光沢を造り出すのは、鏡のように磨き上げたキャストドラムと呼ばれる金属ロール。ツルツルの表面を熱くしてから紙を貼りつけ、その光沢を写し取ることでキャストコート紙が生まれます。中でも本紙は、厚手の高級白板紙をベースとした珍しいもの。ベース紙の面が良いために、キャスト面も一段と引き立ち、印刷や加工では決してマネできない領域へ。特に現場では大判を扱うので、まるで巨大な鏡を想わせる圧倒的な存在感があります。

他じゃ、絶対に造れません。

14 → OKアドニスラフW

存在感ある肌を持ちながら、4色印刷で意外な実力を発揮するOKアドニスラフシリーズ。その秘密と言えばズバリ、本シリーズを生産する苫小牧工場（来年、創立100周年）にあるのです。新旧のバルブ設備を操り、多彩な良質バルブを絶妙に組み合わせながら、この品質の高みへ。そこには、褪色さえ味わいに変えてしまえる、力強さがあります。そしてデビュー間もない本紙は、シリーズの中でも異彩を放つ、冴えた白さが魅力。ぜひとも、ご注目ください。

15 → OKミュージズマリン

どり頑張ったって、同じ紙は二度と造れないんですから。

本紙は、一見似ているようで、実は毎回違う柄に仕上がるという、たった一度の紙。まだ紙が濡れている段階で表面に特殊なロールを当て、立体感ある独特の模様をつけています。イメージとしては、平らな表面を荒らしながら立体感をつけていく製法。ただ、これを毎回キレイに荒らしていくのは、高い技術と、細やかな神経を必要とする作業です。紙の奥深い世界が、果てしない大海原のように広がっています。

紙から果てしなく遠ざかっていく感じが、たまらない。

16 → OKサンド

造り続けていくうちに、紙ではなくなっていくような不思議な感覚が芽生えてきます。“ブライト”、“ミドル”、“ダーク”という濃淡のラインナップで、砂をイメージさせてくれる、本紙。本来、紙から取り除くべき異物を敢えて入れ、なおかつキレイな模様に見せる製法は、他社に先駆け、そして今もトップを走り続ける、オリジナルの技術です。ただ混ぜるだけじゃダメ。混ぜ物ファンシーの真骨頂が、ここにあります。

正直、
造ってて
一番嫌な
紙なんで
ぜひ見て
いただき

18 → OKライトクリーム

嵩高全盛の書籍用紙にあって、本紙はその嵩高技術を追求しながら、同時に驚異の不透明度をひっさげ、軽量・薄物化へと踏み込んだ意欲作です。そもそも引き締まろうとする紙を、ふかふかのまま仕上げるのは至難の業。さらに高不透明性を発揮できる特殊な材料も使うので、予期せぬトラブルの連続を乗り越えての出荷です。しなやかな本紙とは正反対の、力のこもった現場の汗とプライドを想像しながらご覧ください。

コート白ボール という紙のジャンルの中には、たくさんのお柄があります。一見、同じように見えても、その面をよく見れば、それぞれの銘柄に特長があるのです。中でも、本紙のコート面の美しさは、ピカイチ。職人の自信も同様に、異彩を放っていました。たかがコート白ボールと侮ることなかれ。表裏差や、裏面のパリエーションの多彩さなど、どう見たって、その可能性は群を抜いています。

ちがう。

300種類の中から紙を検索して、無料サンプルをお持ち帰りいただけます。

OJI PAPER LIBRARY

〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 (王子製紙本社1階) papertec@ojipaper.co.jp

www.ojigroup.net



この用紙は「OKマットポスト 菊判 Y目 104kg」を使用しています。